

第19章 大山果樹試験地における研究

(昭和23年～昭和30年7月)

第1節 研究の変遷

昭和23年3月の定例県議会において、板野郡大山村に果樹試験地を新設する旨の議案説明がなされ、経費として140万円余が計上された。こうして昭和 23年4月から徳島県立農事試験場大山果樹栽培試験地が発足することとなった。当試験地の前身は板野郡上板町神宅、中川新作氏所有にかかるものであるが、同氏が昭和9年8月に農村の不況打開のため農林省から中開墾(5 ha～30 ha)の許可を受け、同年11月から翌10年6月にかけて延1万4000人を投じて開発し、主として柿を栽植したものである。試験地が開設された当時は、園内にはカキ3 ha、クリ50aが栽植されていたが、戦時中から戦後にかけての 数年間は労力、資材の不足のため園内はカヤ類が繁茂し、中にはアカマツが2～3mにも伸長し、加えてルビーロウカイガラムシが繁殖して、樹勢は極度に衰えていた。当時の担当者は、試験地とは名ばかりで毎日が雑草との闘いであり、ただひたすら手堀りによる開墾、農道の整備、薬剤散布、剪定と重労働の連続であった。23～24年は専ら園地の整備に全力が注がれ、昭和25年になりようやく樹勢も回復したので試験研究に着手することになった。研究の主体はカキであったが、昭和26年からはモモを、昭和27年からはナシの新品種を栽植し、本県における適応性の検討をも開始した。更に28年にはブドウ(デラウェア短 梢園)を開設した。果樹は永年作物であり、品種比較などは十分な研究成果が得られないまま、昭和30年7月に徳島県果樹試験場(勝浦郡生比奈村)の新設に伴い用地、施設、職員のすべてが移管され、同場の上板分場として新しく出発したのである。